

REACTIVE POLYMER COMPOSITION

Patent number: JP61228054
Publication date: 1986-10-11
Inventor: TAKEDA JUNKO; ASANUMA TADASHI
Applicant: MITSUI TOATSU CHEMICALS
Classification:
- international: C08K5/16; C08K5/34; C08L25/02
- european:
Application number: JP19850066666 19850401
Priority number(s): JP19850066666 19850401

[Report a data error here](#)

Abstract of JP61228054

PURPOSE: A composition which is crosslinked extremely rapidly and becomes insoluble in solvents when it is irradiated with light rays with relatively long wavelength, such as visible light ray, etc., obtained by blending a copolymer containing a vinyl group and/or isopropenyl group with dyestuff such as Methylene Blue, etc. CONSTITUTION: (A) A polymer containing $\geq 0.02\text{mol}$ based on the whole mono mer unit of vinyl group and/or isopropenyl group, obtained by copolymerizing divinylbenzene and/or diisopropenylbenzene with another polymerizable monomer is blended with (B) a dyestuff selected from Crystal Violet, Malachite Green, Safranine-T, Rhodamine B, basic Fuchsine, Hafmann's Violet and Methylene Blue. A ratio of the component B to A is ≥ 0.0001 , preferably 0.001-0.01.

Data supplied from the **esp@cenet** database - Worldwide

⑫ 公開特許公報 (A) 昭61-228054

⑪ Int.Cl.⁴C 08 L 25/02
C 08 K 5/16
5/34

識別記号

CAC
CAC

庁内整理番号

7602-4J

⑬ 公開 昭和61年(1986)10月11日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

⑭ 発明の名称 反応性重合体組成物

⑮ 特 願 昭60-66666

⑯ 出 願 昭60(1985)4月1日

⑰ 発明者 武田 淳子 富田林市別井94

⑱ 発明者 浅沼 正 高石市取石3-4-1-133

⑲ 出願人 三井東圧化学株式会社 東京都千代田区霞が関3丁目2番5号

明細書

1. 発明の名称

反応性重合体組成物

2. 特許請求の範囲

1. ジビニルベンゼンおよび/またはジイソプロペニルベンゼンと他の重合性单量体を共重合して得たビニル基および/またはイソプロペニル基含有单量体を全单量体単位の 0.02 モル比以上含有する重合体とクリスタルバイオレット、マラカイトグリーン、サフランー T、ローダミン B、塩基性フクシン、ホフマンズバイオレット、メチレンブルーからなる群より選ばれた少くとも 1 種の色素からなる反応性重合体組成物。

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は反応性重合体組成物に関する。詳しくは、可視光などの比較的長波長の光を照射することによって極めて速かに架橋反応し溶媒に不溶と

なる反応性重合体組成物に関する。

〔従来の技術〕

フォトトレジストを初めとして多くの用途に反応性重合体が利用されており、例えばアルリル酸系重合体、ステレン系重合体などがある。その際に架橋反応性の官能基としてエポキシ基、ハロゲン基、炭素-炭素 2 重結合などを用いた例が知られている。

〔発明が解決しようとする問題点〕

上記した官能基は光感度があまり高くないため、可視光での架橋は起きにくい。したがって比較的長波長の可視光で反応させる目的で色素などを配合し、その色素を励起し、エネルギー移動により反応性官能基を励起することが行われている。しかしながら、その効果は充分ではなかった。また、反応性官能基自身を比較的共役系の長い複雑な構造とすることによって長波長の可視光の照射で反応性官能基を反応させることが可能であるが、その製造が困難であるという問題があつた。